

T. ウィルソン・A. S. スキナー編

『市場と国家』

—アダム・スミス記念論集—

Wilson, T. and A. S. Skinner, eds., *The Market and the State: Essays in Honour of Adam Smith*, Oxford, Oxford University Press, 1976, vii+359 pp.

I

本書は、1976年4月2～5日にグラスゴー大学でおこなわれた『国富論』公刊200年を記念するシンポジウムの記録であり、そこで発表された11の論文と、それぞれの論文に対する(ただしグラスゴー大学名誉総長ケアンクロスの論文だけは例外)あらかじめ予定された2人の討論者の短いコメントを収めている。

だがもしひとが『国富論』200年記念シンポジウムということから、(ある意味で当然のことだが)『国富論』の同時代的意義や学説史上の位置づけといった『国富論』に関する狭義の学史的論議を期待して本書を繙くとしたら、かなりの失望感を抱かされるのではないかと思われる。本書の主要目的は「スミスの貢献を説明・評価することでもなければ、歴史的人物としてのスミスの重要性を讃えることでもなく」、「『国富論』やスミスの他の諸著作で論じられている中心的諸問題のうちの若干のものを、1976年に執筆している経済学者の観点から論ずること」だからである。本書がやや読者の期待に反してこのような性格をとっているのは、ひとつには(そして多分これが最大の理由であろうが)様々な分野におけるスミス自身の貢献については、本書と同一の編者により、「グラスゴー版スミス全集」の補巻として、大部の『アダム・スミス論集』が'75年にすでに刊行されているからである(同書については本誌'77年1月号(28巻1号)に和田重司氏の論評が収められている)。このような本書の性格は編者の序文ではっきりと述べられており、『国富論』200年記念シンポジウムの記録であるにもかかわらず、もし読者の関心が狭義の学史中心であるとするれば、本書の大部分は必ずしも必読ではない。本書はスミス研究書というよりむしろ、スミスとも関わらせながら展開された現在の経済思想や経済学、経済問題についての展望書という性格の方が強い。

しかし現在の状況の展望書という観点からみても、スミスのとりあげた主要問題中の若干との関わりにおいて展開されているために、バランスがかなりよくとれてい

るとは言いがたい。現状の側からみても、スミスがとりあげた諸問題の側からみても、そうである。『国富論』公刊後すでに200年が経過し、解決を要する問題にもかなりのズレが生じてしまっているのだから、これは当然といえば当然のことである。だが、もしそうであるとするれば、なぜ『国富論』200年記念シンポジウムに当って本書のような問題の立て方がされたかが、問われなければならないのであろう。報告論題の設定や配列、論者と討論者の選定などは編者(つまりシンポジウムの組織者)のウィルソンとスキナーによるもののようであるから、この間は主にこの2人の編者に向けられるべきものであろう。しかし単に編者の側に問題があるだけでなく、報告者の方にも編者の意図を誤解した(ないし十分掴みきれないような状況が存在した)という事情もかなり関係しているのではないかと思われる。

本書の通読後、さて何を中心に書こうかといろいろ考えてみたのだが、結局、読み終えたうえでの若干の失望感から書き始めてしまったが、ともかく、ここで本書の構成を書いておくと次の通りである(括弧内は討論者)。

1. 歴史的背景: アダム・スミスと産業革命——C. P. キンドルバーガー(A.ブリッグズ, R. M. ハートウェル)
2. 歴史的展望のなかで捉えられたスミスの貢献——R. D. C. ブラック(D. P. オブライエン, D. N. ウィンチ)
3. 同感と利己心——T. ウィルソン(R. S. ダウニー, M. オルソン)
4. 市場と国家——A. ケアンクロス
5. 発展の普及——W. A. ルイス(H. L. ミント, I. G. ステュアート)
6. 今日の重商主義と自由貿易——J. M. フレミング(H. ギールシュ, W. M. コーデン)
7. 競争: 製品市場——P. シロス-ラビーニ(C. K. ロウリー, A. ノーヴ)
8. 労働市場——E. H. P. ブラウン(L. C. ハンター, D. I. マッカー)
9. 公共財と自然的自由——J. M. ブキャナン(E. J. ミシャン, A. ウィリアムズ)
10. 財政と分配——R. A. マスグレーヴ(A. R. プレスト, A. B. アトキンソン)
11. 公共政策と貨幣支出——R. C. O. マッシュューズ(R. A. ゴードン, R. セイヤーズ)

II

たしかに編者のいう通り本書の表題『市場と国家』はスミスの主要説明対象の一つだったし、そのどちらの性質もがまだ十分説明されつくしていないことも事実である。また、市場と国家の問題をスミスがどう捉えたかを、その生きた時代的背景中でのスミスに即して明らかにすることや、スミスにも関説するけれどもスミスのみにとらわれず過去の他の諸論者の所論を考慮しつつも、現在における市場と国家の問題に対する論者自身の考えを積極的に展開すること、等々には、それぞれ十分な意味がある。しかし本書の諸論文の多くは、そのどれにも徹底していないようである。

これは私の忖度であるが、シンポジウムを企画した編者たちからすれば、すでに『アダム・スミス論集』の編集(ないし少なくとも実質的な構想と執筆依頼)を終えていた関係上、このシンポジウムに期待したことは、論題はスミスにとっても重要だったものを取りあげるけれども、論者には、あまりスミスの個々の言説にとらわれず、与えられた個々の論題について、それを現在の問題として、それぞれの論者の立場から論者自身の考えを積極的に展開してもらったのではなかろうか(編者の1人ウィルソンの論文「同感と利己心」を読むと、実はこの点にも若干疑問の余地はあるのだが)。しかし論文執筆者の立場からすれば、'76年4月初頭のシンポジウムのための原稿を準備している段階では、まだ『アダム・スミス論集』の内容を十分に検討するだけの時間的余裕はなかったし、また『国富論』200年記念の講演という性格からも、編者の意図や『アダム・スミス論集』の内容との関連では必要以上に——あるいは現在の問題点を紙面(ないし時間)の許す範囲内でなるべく包括的にとりあげ、論者の考えを現在に即してはっきりと打ち出すことがやや中途半端にならざるをえなくなる程度までに——スミスの所説の細目点との関連づけを意識せざるをえなかった、というのが実状だったのではなかろうか。その結果、本書は、プラスの面からみれば、スミスと現在との双方についてかなりの程度まで論者の考えを知りうるものになっているが、しかし他面、そのどちらの面からみても多分に不徹底に終るというマイナス面をもつものになっていることもまた否めない事実であり、私にはむしろこのマイナス面の方がはるかに大きいように思われてならない。

もちろん、各論者のそれぞれの主題の扱い方や討論者たちのコメントの仕方は一様でないし、論者、討論者の多くは現代一流の経済学者たちであるから、個々の論文やコメントがそれぞれなりにスミスや現在について興味

ある側面や問題点を指摘ないし提起していることは事実である(ただしそれら個々特定の論点に立ち入ることは、紙巾上、個別的になりすぎるので、省略せざるをえない)。しかし本書全体から、ある幾つかのはっきりした論点が浮かび上がってくるかという、かなり一般的なこと——つまり、スミスは市場機構を重要視し、その説明に最大の精力を傾注したが、決してかつて一時考えられたように国家の役割をほぼ無視して自由放任を説いたわけではなく、国家にも為すべきことがあることを十分に認めていた。その国家の為すべき役割は今日スミスが考えていた以上に拮がっている(ないし危険なまでに拮がっている)が、しかし市場機構はいぜんとして不可欠なものであり、今日の状況のもとで改めて市場機構と国家との適切な関係を考え直してみる必要がある、といった程度の、ほぼ大方のひとが同意するであろうような事柄——以上に、鮮明な論点がでてくるわけではない。これは大勢の執筆者からなる論文集のもつ避けがたい性質ともいえるが、もう少し何とかならなかったものか、という感を拭いえないこともまた事実である。

もちろん『国富論』記念だからといって、『国富論』を常にスミスの時代や学史のなかでのみとりあげなければならぬ、というわけではない。『国富論』評価の変遷を歴史的に跡づけたブラック論文をみても分るように、『国富論』100年記念や200年記念時にも、それぞれのときの同時代の問題を中心に、主にそれとの関連で『国富論』が論じられていた。そのようなわけで、スミスのとりあげた主要問題を現在の観点から論じるという本書の意図自体が、決して筋違いなわけではない。ただ残念なのは、私のみるかぎり、それがかなり不徹底な形で終わってしまっていることである。

『国富論』200年を記念しては、本書や既述の『アダム・スミス論集』、『「国富論」の成立』をはじめとするわが国での一連の研究以外にも、方々で数多くの本や論文が発表された(また今後も公刊されるのかもしれない、最近偶見したものだけでも、F. R. Glahe(ed.), *Adam Smith and the Wealth of Nations*, Colorado, 1978; G. P. O'Driscoll Jr.(ed.), *Adam Smith and Modern Political Economy*, Iowa, 1979 などがある)。もしブラックと同じような仕方でも『国富論』公刊200年時における『国富論』ないしスミス評価の全般的状況を知ろうとすれば、それらのうちかなり多くのものに目を通すことが必要であろう。

〔早坂 忠〕